

月刊 地域支え合い情報

[2017年9月20日発行]

本体 286円+税

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



東北有数の繁華街・国分町（仙台市青葉区）にあるスナック「ヴィラ」

特集 夜の集い場

- **NPO 法人が経営 50 歳からの居酒屋** ③
特定非営利活動法人シニアサロン井戸端会議（宮城県仙台市青葉区）
- **夜の気軽な「交流サロン」** ⑤
おばちゃんカラオケ（福島県会津美里町）
- **老若男女がつながる夜の社交場** ⑦
スナック「Villa（ヴィラ）」（宮城県仙台市青葉区）

- **東北の元気** ⑨
将監公団自治会（宮城県仙台市泉区）
- **どこでもサロン** ⑩
日舞教室（宮城県仙台市青葉区）
- **暮らしを支える支援員** ⑪
社会福祉法人檜葉町社会福祉協議会（福島県檜葉町）
- **まちのしくみ** ⑫
住民同士がつながり、思いを込めて地域づくり（宮城県女川町）
- **被災地の今◆平成 27年9月関東・東北豪雨（鬼怒川水害）** ⑭
認定特定非営利活動法人茨城 NPO センター・コモンズ
常務理事 横田能洋さん
- **宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ** ⑮
- **暮らしを支える支援員** ⑯
こことからだとくらしの相談センター（宮城県女川町）

☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント
(福島学院大学 福祉学部福祉心理学科 教授 日下 輝美さん)

夜の集い場

地域の集い場はたびたび本紙でも取りあげてきましたが、
今回は「夜の」集い場。

公民館、集会所、テイスサービスなどで開かれている日中の集い場とは
何が違うのでしょうか。

夜だから

仕事が終わったあとや家事が一区切りしたあと
日常のあれやこれやから離れて、
開放的な気持ちで過ごせます。

夜のムードで、ふだんは話しにくいこともふみ込んで
話せるかもしれません。

お酒も飲めて、気分は上々で、盛りあがります。

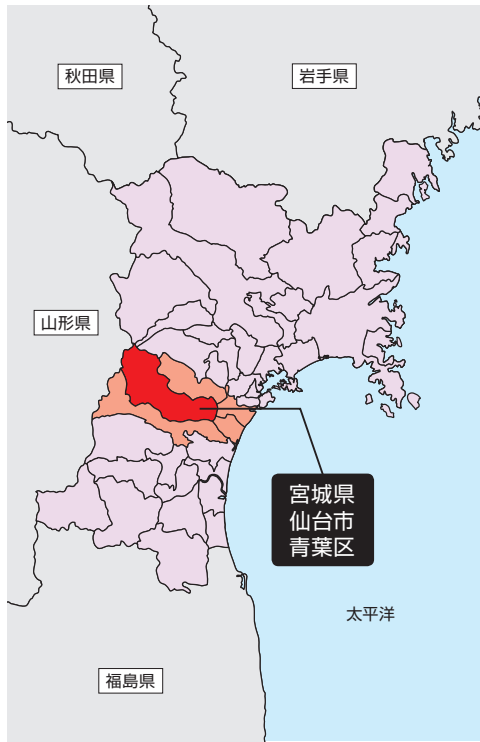
「最近こんなおもしろいことがあってさ」と分かち合える幸せ。

仕事や家庭以外の居場所があること。

いつもの仲間と日頃の労いに。

新しい出会いを求めて。

ひとりで立ち寄っても、仲間と集まっても、
ゆるやかなつながりが育まれることでしょう。
サロンのような日中の集い場と同じように、
夜の集い場も地域を支えている存在です。



これからの、幸多い人生に乾杯!!

NPO法人が経営 50歳からの居酒屋

◎特定非営利活動法人シニアサロン井戸端会議（宮城県仙台市青葉区）

ポイント

- 居酒屋には50歳以上の人たちが集まり、対等な関係で楽しく語り合える。そのことがシニア世代の今日の癒しと明日の活力を生み、つながりを育む
- 法人は、生涯学習や交流のためのイベント、有償ボランティアなどの活動も展開。シニア世代が生きいきした毎を送れるように

シニアが輝く

「俺、パンパースになったら耐えられない」

「いやいや、人間生まれたときはパンパース、死ぬときもパンパースだよ！」

なんて軽妙なやりとりが飛び交うのは、居酒屋「井戸端会議」。シニア（中高年）限定の会員制居酒屋だ。宮城県仙台市青葉区内。仙台駅周辺の大通りから少し離れたところにある、路地裏のビルの上階が、知る人ぞ知るシニアの隠れ家である。営業は月曜日から土曜日の午後5時から10時までで、夜ごとに和気あいあいとほろ酔い談義が繰り広げられている。

会員資格は50歳以上で、年会費は5千円（飲食費は別途必要）。現在の会員数は150人だ。会員同士、「前歴と年齢は関係なく、対等な関係で」がこのルー ルだ。参加者の一人は、「昔の自慢話をした人いいますが、ここではご法度です」と解説する。ただ、年齢に 関係なくとはいっても、最年 長の85歳の会員が話し始めると、皆しっかり耳を傾け る。お互いに思いやって、来

た人皆にとって心地良い空間 がつくられているのだ。

店は、2人の女性店員と元・板前の男性店員、会員が担う日替わり店長の4人で切り盛りしている。店内にはテレビもカラオケもおか れていないが、客同士あるいは客と店員が、会話を楽し めるようにあえてそうしてい るという。

この日は「病気で手術を してから、『これからは医者 に行かない、薬も一切飲まな いぞ』と決めて煙草もやめ た。目標はピンピンコロリ」という健康のことや、「介護 保険のお金って払い損だよ、 と言う人がいる。違うでしょ うって。介護保険を使わない ことこそが幸せと思う」と いう介護保険制度のことな ど、シニア世代にとっての身 近な話題で盛りあがった。

さらに、「いまは小学校の 運動会で全員二等賞のところ も多いんだって。びっくりし たよ」「いまの子ってこうき たらああ言おうとか先のこ とを考えすぎちゃうみたい。 だから神経が疲れるのかも ね」「若い子を呼んで一緒に 飲む日をつくれたらいいね」 などと、若い世代のことも

特定非営利活動法人シニアサロン井戸端会議

「好きなときに、好きなことを、好きな仲間と」



話題に。自分の子ども・孫世代のことを気にかけて、期待していることが言葉の端々からうかがえた。

「ここだけの話も多いんです」と話す会員は楽しそうだ。このような場で心の底から笑い、語り合えることが、今日の癒しと明日の活力につながっているようだ。ときに議論にもなるが、それもまた、腹を割って話せる関係性だからこそ。

第二の人生を楽しく

シニア世代で賑わうこの居酒屋は、特定非営利活動法人シニアサロン井戸端会議が運営している。もともと会員制居酒屋として2010年に開店したが、東日本大震災の影響で閉店。その後会員からの「シニア居酒屋の灯を消さないで」という希望もあつて、13年に再開し、その際にNPO法人格を取得した。

団体の使命は、シニア世代の癒しと活力の場をつくることや、地域内のコミュニケーションを活発にして、シニア世代のネットワーク構築に寄与することだ。「そのように

して、アクティブなシニアが増えて住民の自助力が高まれば、医療費や介護保険の経費低減にも結びつくと考えます」と副理事長の羽田正行さんは話す。

事業の柱は、居酒屋井戸端会議の経営と、同じビルの3階にあるイベントルームの運用だ。イベントルームでは、さまざまなイベントを企画し、生涯学習や交流の機会を創出している。会員になると、居酒屋とイベントに参加ができる。

なかでも、生涯学習の場としての「井戸端塾」は、月2回の開催で100回以上回を重ねる人気企画だ。地域包括支援センターの職員を招いて漢方について学んだり、元テレビキャスターからテレビ業界のこぼれ話を聞いたり、葬儀会社の社員に今日のお墓事情を尋ねたりと、バラエティに富んだ内容で支持を集めている。毎回、20人前後の参加者が集まり、男性の参加者が半数以上と多いのも特徴だ。開講は午後4時から5時までで、終わったあとは講師の先生も交えて、階下にある居酒屋で懇親会を開き、参加



井戸端塾の様子。この日は応用心食カウンセラーの先生を呼んで健康講話

者同士交流を深めている。

ほかにも、イベントルームを拠点に多様な同好会活動や企画が実施されている。整骨院の先生に身体のケアの仕方を教わる健康寿命を伸ばす会や歴史と文化を学ぶ会、麻雀愛好会、スマホ教室、大学生との討論会など、盛りだくさんだ。そうして、仲間とともに学び、遊ぶことで、生きいきと毎日を過ごすことができる。

15年からは、法人の新たな活動として有償サービス「井戸端お助け隊」も始めた。掃除、料理などシニア世代の生活の困りごとを、同じシニア世代の元気に動ける人たちが代行する。1時間700円＋交通費で請け負っており、利用者も活動希望者も会員登録が必要になる。

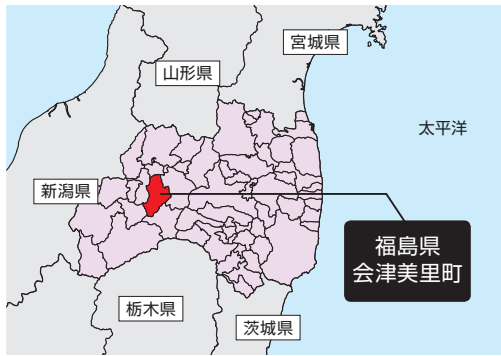
笑顔で暮らせること、健康でいられること、社会の役に立つよう喜びを感じられること、年金以外のちよとした収入があること、そうしたことが豊かな第二の人生につながるとシニアサロン井戸端会議は考えて、多彩な活動を展開してきた。

「退職後の65歳からの10年つてとても貴重で、どう過ごすか悩む。そのために、こういう場をつくったともいえます」と専務理事の高橋義信さんは説明する。誰もが年を重ねる。シニア世代を迎えたときにどんな日々を送るか。シニアサロン井戸端会議は、考えるためのヒントを与えてくれる。田

DATA

特定非営利活動法人 シニアサロン井戸端会議

〒980-0801
仙台市青葉区木町通1-2-40 Mビル1F/3F
TEL/FAX 022-263-7079
E-mail : npo.idobata@gmail.com
URL : http://idobata-kaigi.org/



DATA

おばちゃんカラオケ

通称「おばカラ」。営業時間は夜7時～11時。団体貸し切り可。月曜定休。所在地は福島県会津美里町高田甲2873、電話0242-54-5690。日中の連絡は「衣料の店さくらい」（会津美里町高田甲2885、電話0242-54-2163）まで。



おばちゃんカラオケで定期的に行われる「六区カラオケの集い」

夜の気軽な「交流サロン」

◎おばちゃんカラオケ（福島県会津美里町）

ポイント

- アルコールもオーケーの「交流サロン」は、若者も男性も引きつける
- 女性や高齢者が1人でも気軽に訪れ、夜の「居場所」として親しめる

「飲み屋」ではない！

「おばカラ」の愛称で親しまれる夜の集い場が、福島県会津美里町の高田地区にある。正式名称は「おばちゃんカラオケ」。

1曲200円でカラオケを楽しめ、軽食やソフトドリンク、各種アルコール飲料も注文できる。営業は夜7時から11時まで。団体貸し切りも可。「おばちゃん」でなくても誰でも入れる。20～80歳代までの幅広い年齢層の個人・団体が利用している。

一般的なスナックや居酒屋との大きな違いは、営利よりも住民の交流や孤立防止、心身の健康づくりを目的としている点。その意味では、飲食店より公民館や集会所で開かれる「交流サロン」に近い。カラオケスタジオとコミュニケーション・カフェを一つにしたような場所とも言える。

店主の桜井幸子さん（65歳）は、「誰もが安心して楽しめる場所、高齢でも女性でも、一人で気軽に行けて、ほっとできる場所をつくりたかったんです。日

常の雑事から解放されて、夜のひとときを安心して楽しく過ごせる居場所を」と説明する。

「だから、飲み屋さんとは違います。1曲歌うだけでも、コーヒーを1杯飲むだけでも、おしゃべりを楽しむだけでもいい。気楽に立ち寄ってほしい。来た人がその日一日を笑って締めくくれたら、それでいい」安心して過ごせる「居場所」づくりのため、酔っ払って羽目を外したりするマナーの悪い客は、即刻退場。こうしたきびしいルールも、おばカラが女性や高齢者にやさしい「交流サロン」であることを知れば、合点がいく。

開業当初は、普通の飲食店と勘違いする酔客が多かった。いまでは貴重な夜の集い場として地域住民の理解も広まり、個人はもとより夫婦や家族連れ、さまざまなグループの常連たちでにぎわう。

カラオケの集いで見守り

10～20人ほどでおばカラを借り切り、定期的利用

おばちゃんカラオケ店主 桜井 幸子さん

「夜のひとときを安心して楽しく過ごせる
『居場所』にしたい」



している地域や職域のグループは10を超える。

そのうちのひとつ「六区カラオケの集い」は、高田六区（行政区）内のひとり暮らし高齢者のカラオケサークル。60～80歳代の20人前後が毎月1回「飲んで・食べて・歌って」を楽しむ。午後6時半から9時まで飲み放題、歌い放題で、食事も充実。会費は女性2000円、男性3000円と格安だ。

集いは、同区の元区長で民生・児童委員の小森信子さん（71歳）のアイデアで2015年11月に始まった。「ひとり暮らし高齢者宅への見守り訪問活動をしていると、『私はカラオケが好き』と話す女性は何人もいました。でも気軽にカラオケを楽しむ機会がないという。ならいっそ、そういう人たちをおばカラに集めればいいと思っただけです。定期的にカラオケをしに集まってもらえば、そこが見守りの場にもなるわけです」。

この思いつきを桜井さんに伝えると、「それはいい。みんなで集まってやろう」



小森信子さん（左）と桜井幸子さん

となった。早速、近隣のひとり暮らし高齢者に呼びかけ、小森さんを含め10数人でスタート。その後、口コミで参加者が徐々に増えていった。

小森さんと桜井さんは、「お年寄りのよろこぶ様子を見ると、私たちも幸せな気持ちになります」と顔をほころばせる。

集いの当日に次の活動予定日が決まるが、来ている人にはメンバーの誰かが日程を伝える。その日が近づくと、小森さんや桜井さんに「いつだっけ？」と問い合わせが舞い込む。そこから改めて日程情報がメンバー間でやり取りされる。

飲食をともにし、会話を弾ませ、歌声を響かせること、日頃から連絡を取り合うこと、これらすべてがメ

ンバーの心身の健康を保ち、お互いを見守り、支え合うことにつながる。

暮らしやすい地域に不可欠

集いは月1回だが、おばカラは定休日（月曜）以外は開いている。貸し切りでさえなければ、一人でも気軽に訪れ、居合わせた客やスタッフと夜のひとときを楽しく過ごすことができる。

ひとり暮らしの高齢者のなかには、夜間、不安や寂しさを募らせる人が少なくない。このような夜の集い場が、歩いて行ける範囲にあることは、「高齢でも暮らしやすい地域」には重要な要素だろう。

小森さんは、「桜井さんがいておばカラがあって本当によかったと思う。この地区は恵まれていますよ」としみじみ語ってくれた。

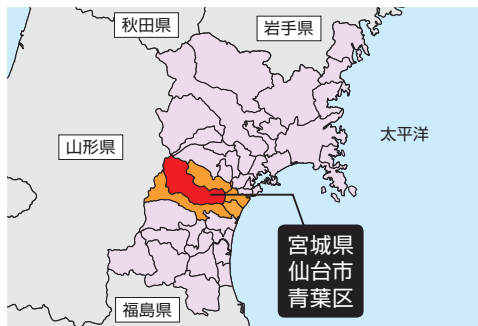
おばカラのオープンは2006年。高田地区の商店街で洋品店を営む桜井さんが、かつてスナックとして使われていた空き店舗を借り、修繕や改装を施し、カラオケ機器などを設置して開業にこぎ着けた。その

際、商店街の仲間や近所に住む友人など10人前後の女性たちが作業を手伝っている。家庭で使われないままになっていた食器や調理器具を寄贈した人もいた。この女性たちはいま、常連客となっておばカラの経営を応援している。いわば飲んで・食べて・歌って楽しむことで、自分たちの大事な夜の集い場を守っている。

おばカラのスタッフは現在、桜井さんを含め女性5人。交替しながら常に2～3人体制で切り盛りする。

桜井さんは、日中は本業の洋品店「衣料の店さくらい」の経営に専念する。夕方4時ごろになると姉に洋品店をまかせ、おばカラの開店準備に赴く。「姉は、おばカラで出す食事の仕込みや調理を手伝ってくれてもいます。家族や仲間の支えがなければ、ここまでやってこれませんでした」。桜井さんもまた支えられ、見守られている。

おばカラにかかわる人たちが織りなす交流と支え合いは、昼も夜も、地域をやさしく覆っている。木



DATA

スナック「Villa(ヴィラ)」

男性3000円、女性2000円の飲み放題・カラオケ歌い放題のコースあり。営業時間は午後8時からおおむね午前2時ごろまで。日曜・祝日休。6~7人程度から団体予約可(食事付きも可)。所在地は仙台市青葉区国分町2丁目14-5「88国分町ビル3階302号」。電話022-796-5230



ヴィラの店内。「花京院ゴルフサークル」の懇親会が開かれていた(8月21日)

老若男女がつながる夜の社交場

◎スナック「Villa(ヴィラ)」(仙台市青葉区)

ポイント

● アルコールとカラオケは人を集めるツール。集まった人をつなげば、地域づくりの期待もふくらむ

「客はみんな家族のよう」

仙台市中心部にある東北有数の繁華街「国分町」。

飲食店がひしめく一角に「Villa(ヴィラ)」という名のスナックがある。テールとカウンターを合わせて20人程度でいっぱいになる、こぢんまりとした落ち着いた雰囲気のお店だ。

夜8時過ぎ。客が徐々に入り始める。20歳代の若者から80歳代の高齢者まで、さまざまな世代の男女が集まる。会話を弾ませ、杯を交わし、歌声を響かせる。

「ここに来るといろんな人と友だちになれる」と話すのは、常連の一人、61歳男性。「知らない者同士が仲良くなるなんて、ほかの店では滅多にないよ。ここではそれが普通なんだ」。

月2~3回通う40歳女性は、「この店の客はみんな家族みたい。だから一人で来てもいやな思いはしない。安心して過ごせる」と語る。

80歳代の女性が着飾って来店し、カラオケを熱唱、若い男女が喝采を送る。出張帰りのサラリーマンが土産を持参し、居合わせた客にふるまう。

忙しいマスターやスタッフに代って、客が水割りをつくる——そうした光景が、夜々練り広げられる。世代、性別、職業・職歴、住んでいる地域、社会的立場といったもろもろの垣根を軽々と飛び越え、老若男女が出会い、親しく交わる。団体での利用も多い。常連たちが自主的に誕生会や「カレーパーティー」などの食事を催すほか、スポーツ・娯楽・生涯学習のサークルなどが、しばしば親睦会の会場になっている。

スナックで地域づくり

国分町にこの店が誕生したのは2015年5月。マスターの湯村和彦さん(65歳)が、「自らの生きがいづくりをしながら、地域づくりにも貢献したい」と開業した。



国分町の一角に店を構える



マスターの湯村和彦さん

「店に集まった人をつなぐことで、
新たな地域活動のきっかけになれば」

実は湯村さんは、仙台市の高齢者活動ネットワーク組織「せんだい豊齢ネットワーク」の代表者会議議長のほか、健康づくりや生きがいづくりのアドバイザー団体「健康・生きがいづくりネットワークみやぎ」の会長、健康マージャン普及団体の副会長などを務める、高齢者活動支援のスペシャリスト。自らも「高齢者」の仲間入りをする年齢に差し掛かって一念発起し、スナックを始めた。

「自分自身が活躍できる場と、年金プラスアルファの収入を得る。そのうえで、地域のコミュニティ」
ケーションの欠如や孤立といった課題の解決に、少しでも役立てることをしたかった」
スナックの業態を選んだのは、「少ない資金で開業可能で、地域に根ざした経営形態であり、人が集まる場になるから」という。
「アルコールやカラオケは、人を集めるためのツール。私やスタッフが集まった人たちをつなぐことで、新たな地域活動を創出するきっかけになれば本望」
単なる飲み屋と侮ることなかれ。盛り場には案外貴重な「夜の地域資源」が埋もれている。さあ、発掘に出かけよう。**木**

専門家に聞く地域づくりのヒント

輪になれば、和と話に花が咲く ナイトサロン



福島学院大学 福祉学部福祉心理学科 教授

日下 輝美 (くさか・てるみ)さん

宮城県柴田町在住。東北大学大学院経済学研究科博士課程前期現代応用経済科学専攻(修士・経営学)。社会福祉法人柴田町社会福祉協議会を経て、2007年4月から現職。専門は地域福祉論。現在、宮城県柴田町教育委員会教育委員、社会福祉法人福島県社会福祉協議会評議員、福島県伊達市版生生涯活躍のまち運営推進協議会委員などを担っている。

3つのレポートは、日中のお茶会やサロンとは異なる、カラオケ、飲みニケーションなど夜の居場所づくりや、見守り合い活動で、地域社会をつなぐ先駆的な取り組みだと思います。これまでの地域福祉活動のスタイルは、どちらかといえば、生活支援を必要とする方や地域ニーズに対応するために、民生委員・児童委員やボランティアのお力をお借りすることが多かったと思いますが、「何曜日の何時から何時まで、年齢の制限」など、担う(支援する)側のルールや都合が存在していました。ここでは、ダイヤモンドを満たすための1つの方策として、「餅は餅屋」の発想性とコミュニティ・ビジネスとして商店街をサロン化することにより、多様なイベント、サロンが誕生するのではないかと考えます。

特定非営利活動法人シニアサロン井戸端会議

シニア世代の癒しと活力の場を目指し、シニア世代のネットワークづくりのため、魅力ある多様なイベントが企画されています。ここでのキーワードは、「学びの場」「憩いの場」「遊びの場」「健康づくりの場」「交流・コミュニケーションの場」などの機能と役割を担っています。参加者の“ピンピンコロリ宣言”は、とても印象に残る言葉です。また、会員参加型の有償サービス「井戸端お助け隊」は、生活上のちょっとした困りごとにも会員同士が支え合うお互いさまの活動も取り組まれており、コーディネーター役の力量がうかがえる活動事例であるといえます。

おばちゃんカラオケ (通称:おばカラ)

カラオケでマイクを握った経験がある世代の方々が集う居場所は、気軽に誰でも集える空間で、主催者も顔なじみの関係性に魅力を感じました。また、演芸鑑賞のように参加者側が受け身になりがちな企画から、マイクを片手に、主役になれるところに興味を持ちました。カラオケを通じて“楽しみ、語り合い、見守り合う”活動は、商店街の仲間や近所の方々、民生委員・児童委員の温かい気持ちと企画・運営力の高さがうかがえる活動です。

スナック「Villa(ヴィラ)」

東北地方最大の歓楽街「国分町」にある老若男女が集う社交の場「ヴィラ」は、飲みニケーションをとおして世代交流ができるところに魅力があります。また、普通の生活で考えれば、朝から夕方まで人はさまざまな活動をとおして人とのつながりや機会がありますが、夕暮れ時から夜間帯は、特に、仕事帰りやリタイヤされた方にとっては、憩いの場であると思いました。ここに来て、ひとりで飲むのもよし、人恋しくなったら初対面の人と仲良く時間を楽しむ。マスター、湯村さんの豊富な経験と人間味豊かな人柄が、新たな国分町の居酒屋スタイルをつくっていると思います。



50回目

市民リレー

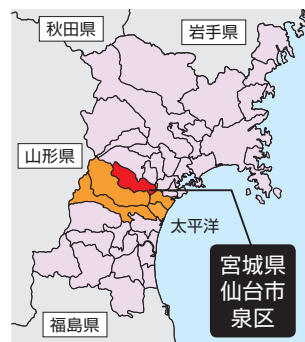
東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

月3回のサロンで 住民交流

◎将監公団自治会（宮城県仙台市泉区）



多世代交流の場でもある



隣接するスペースで卓球を楽しむことも



他愛のない会話が楽しい

仙台市泉区にある将監公団住宅内の「将監団地集会所」では、今年4月から月3回のサロンが始まった。4時間の開催時間中、出入りは自由。参加費は百円。自治会が用意したお茶菓子とともに、近隣の地域のことや今度開かれる防災訓練についてのおしゃべりが弾む。隣接するスペースで卓球を楽しむこともでき、それぞれ思い通りに過ごすことができる。3回のサロンのうち1回は、手づくりの豚汁やたこ焼き、チヂミなどの昼食をみんなでとるのが定例だ。「引越してきたばかりなので、知り合いをつくりたくて」「都合のつくときは顔を出して、おしゃべりを楽しんでいます」と話す参加者たち。

将監公団住宅は、UR都市機構が1973年に供給した640戸の団地だ。現在580世帯が住み、公団住宅のみで自治会を組織する。自治会会長の菱沼俊行さんは「入居者層は、子育て世代と高齢者世帯の2極化が進み、40〜50歳代が少ない」と話す。自治会では、これまで夏祭りの開催をメインに住民交流を図ってきたが、予算と担い手の確保が難しくなり、今年度は中止となった。その代わりの交流の場として、月3回のサロンが誕生。自治会が

毎月発行する広報紙「かわらばん」で周知しているが、1回あたりの参加者は6〜7人で、もつと気軽に集会所に足を運んでもらうきっかけをつくらうと、毎回違うテーマで学ぶ「日曜塾」を開講した。8月に開かれた第1回目は、遺言書作成と相続手続きをテーマに、行政書士の住民が講師役を務め好評だったという。

将監公団住宅は設計上、階層ごとの廊下がなく、2戸の間に縦階段があるタイプのため、同じ階に住んでいても、横の住民のつながりがつくりにくいという悩みをもつ。ここでは自治会のほかに、子ども会や老人クラブ「将監なごみの会」、「ひまわり文庫」などが活動しており、それぞれの活動が少しずつ重なって交流が広がることを期待する。

小



会場の将監団地集会所



どごでもサロン

第2回

自然なつながりと支え合いを生み出す



つながり保つ日舞の仲間

仙台市青葉区国見

毎週月曜の午前10時。

仙台市青葉区の国見コミュニティ・センター（国見4丁目4・4）で日本舞踊の教室「熟年禮匠会」が開かれる。国見地区老人クラブ連合会の生涯学習活動「熟年教室」の一つで、1991年に発足し、今年で26年目を迎える。生徒は現在、70〜90歳代の女性約20人。

師匠の合図で和服姿の女性たちが一齐に、流れるように動き出す。

稽古に参加しているのは、10人ほど。

残りのほぼ半数は、壁際に長机を並べて座り、稽古を静かに見守っている。服装は普段着のまま。体調不良や体力低下で踊るのが難しくなった人たちで、いわば教室の「卒業生」だ。

教室はもともと60歳以上を対象にしている。25年以上にわたる活動のなかで、長年通う生徒たちも年を重ね、身体的な問題を抱えるようになる。

踊れなくなれば、普通は、教室を去るしかない。

この教室は違った。卒業生の一人、91歳の女性は、

「足腰が悪くて通えなくなっても、仲間が『車に乗せてあげるから行こう。お茶飲みするだけでもいいから』って誘ってくれる。だから通えるのよ」と語る。

そして、卒業生たちはただ稽古を見ているだけではなかった。教室は午前10時から正午までの2時間。このうち30〜40分程度が休憩にあてられる。この間教室は、「お茶飲みサロン」となる。卒業生は、全員分の長机と椅子を出し、お茶を入れ、お菓子を配る。休憩が終われば後片付け。サロン活動の担い手として活躍している。

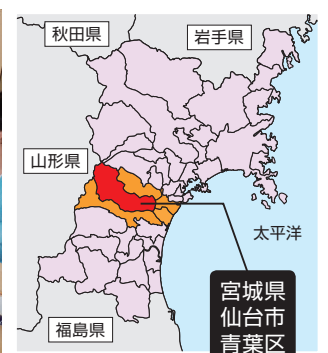
「教室は、踊りの楽しさやよろこびを皆で分かち合う場なんです」と説明するのは、ボランティアで師匠を務める風流分家家元の風禮匠（おおとり・れいしょう「本名・二瓶和子」）さん。「たとえ踊れなくなっても、教室に来て仲間にあううれしさ、お茶飲みする楽しさは変わりません」。

20年あまり教室に通う77歳の女性は、脳梗塞を患い歩行障害が残った。それでも師匠や仲間への励ましを受けながら通い続け、大幅に回復。「ここに来る

のが最高のリハビリ」とよろこぶ。現在は長年の経験を生かし、踊りの指導補助をしている。

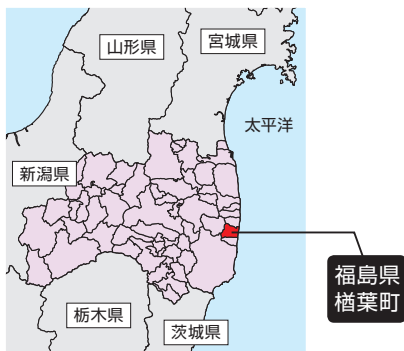
踊れなくなっても通える日舞教室は、支え合いの素敵な舞台。やさしさといわわりが舞い踊る。

木



住民のためにできること。 次なる一步をとともに描いて

社会福祉法人榊葉町社会福祉協議会
(福島県榊葉町)



榊葉町の生活支援相談員は、東日本大震災により避難した住民の見守り活動を行ってきた。これまで、仮設住宅や借上げ賃貸住宅(みなし仮設)を全戸訪問し、必要に応じて専門機関につなぐ役割を担ってきた。

相談員は町社会福祉協議会の職員であり、2017年9月現在、いわき地区に20人、会津地区に2人が配置されている。いわき地区の主任相談員の古市美津江さんは、見守りについて、「傾聴を大事にしています。何気ない会話のなかで、相手の求めていることや、ささいな変化にも気づけるように」と話す。また、「いま」、「これから」ばかりでなく、住民の「これまで」を尋ねてみることもたいせつだという。若い頃を思い出して話そうち、皆生きいきするそうだ。そして、訪問の結果、問題が見つければ、専門職につなぐほか、住民ができることは自身で動いて解決してもらえらるよう助言を行ってきた。

15年9月には避難指示



生活支援相談員の皆さん

解除準備区域が解除され、相談員は帰町した住民の自宅訪問も始めた。17年7月時点で、住民基本台帳人口7215人中、町内居住者は1784人だ。まだ人がまばらな状態で寂しさを感ずる住民にとって、よく見知った相談員の訪問は安心につながっている。

相談員はこうした見守り活動のほか、小名浜と四倉の両地区で定期的にサロンを運営して、住民同士の交流の機会も設けてきた。支援にあたっては、行政や榊葉町地域包括支援センター(町社協受託)とも協力し合ってきた。相談員が住民の近いところで課題を把握し、現在は月2回の会議で情報共有している。榊葉町住民福祉課課長補佐の玉根幸恵さんは、「情報共有の場が連携の第一歩」と語り、いまある職種で互いに補い合って支援を行いたい考えだ。

来年3月には、仮設住宅と借上げ賃貸住宅(みなし仮設)の供与が終わる。榊葉町地域包括支援センター(町社協)の生活支援コーディネーターの江尻しのぶさんは、「住民が日常に戻るなかで、これまでのような見守り体制は今後も必要かどうか。相談員の活動や役割の形を変えていく時期かもしれない」と話す。玉根さんは、「これからの町には「住民に寄り添っていくことや、地域に住民が交流できる場をつくって住民主体の活動を支えていく役割が求められる」と言う。そのうえで、「相談員の皆さんには、被災者支援で培った経験をさらに活かしていただけたら」と期待する。

DATA

社会福祉法人榊葉町社会福祉協議会

〒979-0604
福島県双葉郡榊葉町大字北田字鐘突堂5-5榊葉町保健福祉会館内
電話 0240-25-4157 FAX 0240-25-4620

社会福祉法人榊葉町社会福祉協議会・生活支援相談員事務所(いわき)

〒970-0226
福島県いわき市平下山口字桃木沢3-1(高久第9仮設住宅内)
電話 0246-84-7151 FAX 0246-84-7152

相談員(町社協)の古市さんは、「いつか、住民の暮らしにある伝統、文化、支え合いなどの宝物探しを皆でして、それをお披露目する機会をもてたら素敵ですね」と夢を語る。行政・地域包括支援センター・町社協それぞれが向かうところは重なるはずだ。町に帰る人、町の外で暮らす選択をする人、まだ決められず悩む人、一人ひとりがその人らしく輝けるような支援を目指して、ともに前へ歩む。



住民同士がつながり、思いを込めて地域づくり

宮城県女川町



宮城県
女川町

JR石巻線の終着地点、女川町。東日本震災後、2015年に再開された女川駅からは、商業施設越しに、きれいな海を望むことが出来る。同町では、3172世帯、6672人（17年8月31日時点）が暮らす。津波で被害を受けた沿岸部の14地区の集落地を留意するため、19か所の災害公営住宅団地等に計1000戸近くの住宅を供給するよう、整備を進めている。

「設」に暮らす人たちの支援を担当し、ほかの3団体が地区担当制で仮設住宅入居者や地域住民を見守っている（詳細は16ページ）。

この取り組みでは、各サブセンターが仮設住宅の戸別訪問や地域でのサロンを運営。同町地域医療センター、同町保健センター、同町社協らと、担当地区ごとや全体での会議を定期的

に設け、情報交換をしながら、住民の状況把握をしたり、課題解決のための検討などを行っている。

複数の団体に委託して支援員を配置する自治体は多くないが、同町健康福祉課の技術参事三浦ひとみさんは、「介護事業者には、まちのインフラなどが復旧し、整ったところでまちづくりに参加してもらうのではなく、震災直後から住民に寄り添ってかわりをもってもらいたかった」と

地域住民の支え合いへ

11年11月、同町健康福祉課は、被災者支援事業として、「ここからからだをくらしの相談センター」を開設した。4組の民間団体が、それぞれサブセンターを受託・運営。1団体が借り上げ賃貸住宅（みなし仮

話す。介護事業は、利用したい人が事業所へ登録し、サービスを受けるが、支援員として事業所職員から住民のもとへ伺うなかで、地域に暮らす人たちの様子がさらに見えるようになってきたという。

同町が今年度で仮設住宅の供与期間を終えることから、支援員らは、今後住民同士で見守り合い、助け合ってもらうため、住民に見守りたいせつさを伝えるように励んでいる。また、今年度より町に2人配置されている生活支援コーディネーター（町社協に委託）

も支援員としての活動経験があり、住民間の支え合い活動をあと押しする。会議への出席や、支援員のフォローにもあたる、同町社協地域福祉係係長の高橋信二さんは「これからの見守りの体制づくりをサポートしていきたい」と話す。

移転に際した交流促進

同町町民生活課では、複数の部署が垣根を越えて情報や課題を共有する「分科会」を設けている。各課の事業に関連しながら、各課が単体で対処することが難しい課題、特に住民間のつながりづくりに関する課題に対して、同課が中心となって協働するためのものだ。

そのなかで、「災害公営住宅に入るまで、同じ住宅で生活する人がどんな人たちかわからなかった」という、災害公営住宅入居者の声をもとに、入居予定者が事前に知り合える機会をつくらうと、住民懇談会を実施している。災害公営住宅や防災集団移転の団地ごとに、入居予定者へ住宅や公共施設の構造などの説明会を開き、同時に参加者が自己紹介をしたり、意見交換

をする内容を盛り込んだ。たとえば、住宅の同じフロアに住む人同士でグループを組んで机を囲み、集会所や公園の説明を受けたあとで、それについて意見や要望を話し合う。意見交換よりも気楽な話題で交流をしたり、災害公営住宅のホールに飾り付けるスペースインテイルを地元の工房と協力して作成することも。行政から住民に知っておいてほしい事柄を説明し、ただ聞いて帰ってもらうので



住民懇談会

はなく、人と人がつながるきっかけにしてみようと思った。また、一度参加者に話し合ってもらったことについては、行政などによる関係部署での協議の結果や調整の進捗を、その後の懇談会で参加者に報告することにより、継続的な参加を促すことができた。

「顔つなぎのために集まってもらうのではなく、話し合いという目的をもって足を運んでもらうことにした。移動手段がない人を車に同乗させたりして、町民にも助け合って参加して

もらえた」と話すのは、同町民生活課生活支援係係長の宇野裕晶さん。懇談会ではざつくばらんな意見交換が進み、新生活に対する住民の強い関心がうかがえたという。

参加者の間では、震災以前に住んでいた地区、昔のまちの様子について振り返ったり、思い出話をしたり、想いを共感し合う場面もあったという。最終的には、入居後、集会所を使った餅つきなどのイベントを行うことで、施設の利用方法を理解しながら交流を深めることもできる。

参加者が互いに顔と名前を覚え、行政区よりも小規模な住民のつながりを支えることで、移転先で新しい行政区を立ちあげて役員を選出する際も、話し合いがまとまりやすくなっていたようだ。

また、同課は町の広報誌にて「コミュニティの広場」というコーナーももつ。住民



商工会青年部主催の盆踊り

懇談会の様子を報告するほか、町内のきずなづくりの催し、サークル活動などを住民に紹介することで、住民同士のつながりをあと押しする。

まち全体で集い、まじわる

町民全体を巻き込んだまちづくりを励んでいるのが、商工会青年部だ。商工会は、地域内の事業者が互いの事業の発展や地域の発展を目的に協力するための組織。女川駅前の商業施設シーパルピアなどを会場にイベントを開催するなど、青年部が町内の全世代に向けた交流促進などに取り組んでいる。

青年部は45歳が定年で、同会では25人ほどが所属している。個人商店の店主など事業主や、その跡取りなどがなる正部員と、会社などに勤めているながら会に賛同し、協力する賛助部員があり、同会青年部員はそれぞれがおよそ半分の割合を占めている。

「行政などがまちを盛り上げようとしていて、まちで販売をしている自分らが加わることで、もつと盛り上げられると思う。自分たちで盛り上げないことには始まらない」と語るのは、今年度から青年部部長を務めている鈴木行雄さんだ。

まだ就任から半年が経たないが、盆踊り大会や映画の野外上映会といった2つのイベントを主催し、成功させた。

盆踊りは、昔は町内の行政区ごとに行われていたが、現在も開催している行政区はごくわずかで、昔ながらの風習を楽しんでもらいたいと、全町対象の盆踊り大会を開催。季節行事を楽しみに浴衣で参加する人も多く、好評だった。残念ながら盆踊りの日程が重なってしまった行政区もあったが、来夏は町内で重複せずに、全行政区から参加可能な盆踊りにしたいと意気込む。

野外上映会は、日没後の駅前広場で開催し、駅舎の壁沿いに張った巨大スクリーンへ、人気のアニメーション映画を投影した。飲食ブースも設け、子どもから高齢者まで、幅広い年齢層のおよそ500人が来場。各世代からそれぞれの好みに合わせた上映作品のリクエストと、次回開催の要望の声がかれた。

「いろいろな催しなどをきっかけに、若者から高齢者までがこの女川町にずっと住み続けたいと思ってくれたらうれしい」と鈴木さん。特に同町に暮らす人のためになるイベントづくりを意識し、まちの人がふれあい、つながりを強めたり、地元への愛着を深める思い出づくりになるような活動にも力を入れていく。

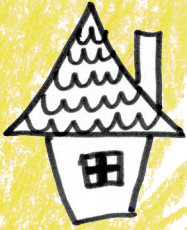
青年部は月1回の会議が基本だが、イベント前の準備期間には毎週のよう集まる。商工会の活動に参加すること自体が異業種間・異世代間の交流にもつながっていると部員たちも実感している。

いわゆる支援機関以外でも、被災したまちを明るくしてくれる、まちづくりの担い手があちこちにいます。交流を重ねながら、住民がもつ支え合いの力はますます大きくなりそうです。

2

水害から2年目が経過した 常総での取り組み

認定特定非営利活動法人茨城 NPO センター・コムズ 常務理事 横田能洋



1967年生まれ。1991年社団法人茨城県経営者協会に就職。1996年に有志で茨城 NPO 研究会を発足させ、1998年11月に茨城 NPO センター・コムズを設立。同年経営者協会を退職しコムズの常務理事・事務局長となる。社会的排除に関する取り組みに重点をおいており、2015年7月よりコムズの代表と成る。同年9月の水害で被災した常総市民の支援活動を行うたすけあいセンター「JUNTOO」を立ちあげ、災害からの復興に向けて活動中。

前回の報告で、復興段階では心の傷の回復とコミュニティ再生がテーマになるとし、①助け合い事業、②オーナーが直せない家の再生支援、③安心して住める地域にするための地域防災、④空家を改修した複合的な拠点づくりに取り組んでいることを紹介した。

4つ目の拠点は単に施設をつくることが目的ではない。ひきこもりがちな高齢者が家から出てきて人と話し、生きがいを持つ場をつくること、障害のある人やこの地域に多い日系ブラジル人などがその人ができることで皆の役に立てる機会をつくること、子どもから高齢者まで互いに学び合える場をつくることを目指している。

診療所だった場所は、読書ができたり習いごとができる場に、住宅だったところは多文化小規模保育の場、36畳の広間がある古い母屋は周辺に暮らす人の「みんなのリビング」にし、2階にはボランティアアや旅人、ときどき常総に

戻りたい人が泊まれる部屋にする。庭も広いので、ブラジル人が好きなバーベキューができる。まさに多世代、多文化の接点がつくれるこの空間は、市民の参加で再生していくプロセスがコミュニティの再生につながると考えている。

昨年9月から半年かけて掃除を続けてきたが、今年の3月に土地(約500坪)すべてを買い取ったという会社が現れた。このまま諦めたら大事な場所も皆の希望も消えてしまう、もうこれ以上家が壊されるのを見たくない、そんな思いで買い取れることを決意。それからの半年は、銀行の融資や国や県の補助の申請書類の作成、融

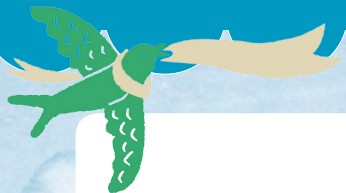


資や出資の受け皿となる会社の設立、融資の返済財源を生む事業の企画に毎日取り組んだ。

保育ニーズを調べたところ、市内の0歳～5歳の外国籍住民330人のうち半数近い165人が在宅にすることがわかった。拠点でこうした保育事業を行うと、預けたい親のニーズに応えるだけでなく、小学校入学前の日本語指導ができる。さらに、地域で育った外国の若者が保育の担い手となれば、職域を広げつつ保育、教育、介護の分野での多文化ソーシャルワークを担う人づくりにつなげていける。

地域にある場を、外国の人たちと障害のある人たちが活躍できる場にしつつ、自然な交わりのなかで心の壁をなくしていきたい。そうした実践をすることで、常総の空家活用、災害復興や地区防災、多文化共生の実践を学びに行こうと全国から人が来てもらえるようになることを目指して、今後も地道に頑張っていきたい。

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

男の居場所

私のアフターファイブにおける「居場所」として多大なる貢献をしてくれた、くされ親爺の見世(店)が閉店しました。料理、酒とも自慢の味、まさに中高年の男の居場所として、大いに活用しました。数少ない居場所的な存在が減ることは、私自身の存在が無くなるようなもので、困ったものです。親爺には、早く新しい見世を準備するよう懇願しているところです。

こんなこともあって、ふと私の居場所、特にアフターファイブ、休日等の居場所を数えてみました。思った以上に「ない!」と痛感。

偏屈で頑固で不器用で、隣の紙面のアクティブな浜上さんとは対照的(頑固さは、浜上さんのほうが圧倒的ですが…)。真面目なのか、行くところがないから、自宅に帰るのか? 休みは、家族は出かけても留守番(と言っても、何もしない)のほうが好き。コーヒーを飲みつつ、好きなジャズを聴き、昔のヘップバーンを観て、疲れたら、椅子にもたれて昼寝。(自堕落ですが、)最高と思っていたのですが、日頃「居場所づくり」とか「支え合いを」とか言っておいての言行不一致。考えてしまいました。

趣味を考えても、ひとりで好きなことをすること中心。友人たちと出かけることは皆無に近い。ですから、浜上さんと山下さん(浜上さんの^{ぶんげい}の友、当事務所アドバイザー)が、弥次喜多道中に励むのを横目に、俺にはできないと思うのです。二人とも社協マンのフレンドリーな姿勢を堅持しての老境入り? 私は、やはり「人嫌い」とは思わないが、誰にでもフレンドリーにはなれないのです。

新総合事業で、悪戦苦闘の生活支援コーディネーターの諸兄、男には、私同様の偏屈者が多いので、お行儀のよい対人援助では手に負えません。しかし、案外シンプルですよ。

楽しいことでの成功(満足)体験を地域で持たせることに尽きるようです。仕事人間からの解放ですか? すると、日頃仕事に執着もない私の場合、何からの解放であれば、居場所ができるのでしょうか。

ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上 章



活動の担い手が高齢者中心という現実のなかで～会の進め方は?～

前号で私の所属する地区福祉委員会のことにふれました。役員20人の平均年齢は75歳超で(うち8人:4割は単身世帯)あること。そのなかで、組織をどう運営し、活動を持続的なものにしていくか?が、重要なテーマです。現実の活動は、毎月1回の役員会やふくし部会、カフェ、サロン、歌おう会、フォークダンス、ボランティアの集い、3か月に1回程度のふくし講座、ワンコインパーティ(地域デビューやつながりづくりが目的)、ひとり暮らし高齢者の集い、地区福祉ネットワーク会議、不定期の広報部会、交流イベント部会、認知症予防事業、夏と秋のイベント事業など、いろいろな活動を行っています。

ひとりの役員がいくつもの事業を担当して、かなりの出番になります。それでも、皆さん嫌がらずに楽しく活動をされていて感心します。そのモチベーションのものはなんなんだろうか?と考えたりします。個々人の思いに由来することを除いては、「会の進め方」にあるように思います。

会の進め方で大事にされていることは、「個々人の意思や都合を優先し尊重する」ということです。けっして参加を無理強いしたり、参加しないからといって批難したり責めたりすることはありません。地域活動は、あくまでも任意の活動であるため、このことは大前提になります。そして、「行事や会議への参加が“楽しい”と思ってもらおう」ことです。行事の世話をする人も楽しんで行っており、また部会などの会議では、コーヒーを出し、メンバーによる差し入れの茶菓子を食し、その場が和やかで楽しい雰囲気があります。そして、「参加者一人ひとりの思いや意見が尊重される」ことがあります。

もちろん委員個々人の考え方、性格などの違いもあり“合う合わない関係”もありますが、全体としては会や活動に参加することが苦痛ではなく、むしろ楽しんでいられるように見えます。そうしたことが、忙しくても活動が持続している要因になっているのだらうと思います。

平成29年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

<ステップアップ研修>

【仙台会場①】9月21日(木) 宮城県自治会館

講師:永坂 美晴(明石市望海在宅介護支援センター センター長)

<講座6>地域支え合い活動等の現地視察 兵庫県西宮市・宝塚市視察研修

【宝塚・西宮会場】10月11日(水)~13日(金)

講師:大坂 純(東北こども福祉専門学院 副学院長)ほか

平成29年度 宮城県地域福祉コーディネーター研修事業

<講座8>地域の支え合い活動の発見と活性のための体験型講座

～第1回住民研修(宝物探しのワークショップ等)への参加と講義・演習～

【大和町会場】10月4日(水)

午前:大和町保健福祉総合センター/午後:まほろばホール

講師:高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)

酒井 保(ご近所福祉クリエイター)

池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

<研修1>初級研修

【仙台会場②】10月5日(木) 仙台市福祉プラザ

講師:高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)

池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階 TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601



こころとからだの支援員の皆さん



暮らしを支える支援員26

複数の民間団体が 協働して支援

こころとからだの相談センター
(宮城県女川町)



宮城県女川町では、被災者支援事業として町健康福祉課を中心に「こころとからだの相談センター」を運営していて、同町社会福祉協議会、社会福祉法人元気村、ばんぷきん株式会社、一般社団法人震災こころのケア・ネットワークみやぎが、サブセンターを運営している(本紙12ページに関連記事)。今年度末に仮設住宅の供与期限を控え、計6人の「こころとからだの支援員」が活動。震災こころのケア・ネットワークみやぎの支援員1人が借り上げ賃貸住宅(みなし仮設)の訪問・相談業務を行い、それ以外の3団体5人が、それぞれの担当地区で仮設住宅等の戸別訪問や住民間のつながりづくりのサポートをしている。

ヘルパーを派遣する訪問介護などが専門のばんぷきん。その支援員阿部弘子さんと阿部清子さんは、主に戸別訪問や、歩行運動による認知機能改善・交流促進の体操を実施したり、仮設住宅でのお茶会の開催、地域でのお茶会の手伝いなどを行っている。担当する地区に自立再建の転入者が多く、既存の地域の住民が夏祭りなどを企画し交流を図っていて、「新しい地域に上手くなじめない人もいるが、健康を維持することで、それぞれの地域にとけ込んでいきやすいだろう」と話す。

同町社協支援員の藤井美代子さんと菊池きくえさんは、「見張りではなく、見守りが住民の間に浸透してきた」と話す。訪問を中心に活動し、地域に合わせたコミュニティづくりを企画した

り、お手伝いとしてお茶会に参加したりする。これまで仮設団地のなかなどで誰かの身に何かがあれば支援員に報告してくれていた住民たちが、今後は住民間で情報を共有して支え合っていくことに期待している。

元気村の支援員相澤佳次郎さんは、継続的な集い場づくりとしてお茶会や手芸のサロンを開催。区の行事にも参加している。担当する仮設住宅では、入居者間でよくつながっている様子がうかがえることから、精神面のケアや不安を取り除くことに力を注ぐ。元気村はサブセンター受託団体のなかで唯一町内に事業所をもっていないため、本事業終了とともに同町を離れる相澤さんは、「まちを離れても、次に訪れたときに少しでもよりよい地域になっているのを感じられたらうれしい」と話す。

仮設住宅の供与終了に合わせて本事業も今年度で終了するため、各サブセンターが、仮設住宅からの転居に向けたサポートをしたり、すでに転居した人やこれから転居する人がより充実した生活を送れるよう、残された期間で少しでも支え合いの姿勢を地域に広げようと励んでいる。**清**

こころとからだの相談センター

DATA

〒986-2261
宮城県女川町女川浜字大原316(女川町健康福祉課)
TEL 0225-54-3131 FAX 0225-54-3959

☆次号予告 特集「仮設住宅から継続する活動」

平成29年度 宮城県生活支援コーディネーター応用講座

●応用講座 実践編 ～地域の元気達人養成講座～

【栗原会場】 10月3日(火) 栗原市市民活動支援センター
講師:酒井 保(ご近所福祉クリエーター)

購読者を募集しています!

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか?

購読会員 年3,696円(年12回、送料込み)

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

◎お振込先 ●ゆうちょ銀行振替口座
口座番号: 02260-9-46303
加入者名: 全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、

①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み
を記入してください。

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

お手伝いしてほしいと思っても「遠慮」がつかまとうと思います。日常生活のことを継続的にとならねばならぬので、59号特集では有償であることが遠慮のハードルを少し下げてくれることを学びました。お手伝いする人としてもらう人を「気兼ねない」フラットな関係につなぐ工夫として興味深かったです。(青葉区 S.N)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
E-mail joho@clc-japan.com

編集後記

今回、3-4ページの特集記事を担当しました。なるべく会話を再現して楽しい居酒屋の様子をお伝えできればと考えて執筆しましたが、いかがでしたか。少しでもお届けできていれば幸いです。ところで、この夏、雨の日が多かったですね。なんと、仙台では36日連続の雨で、観測史上1位のこと長く雨が続いたあと、早くも朝晩肌寒い日々になってきました。どうか皆さま風邪など引かれませんようにご愛ください。(田中)